

## できる限り自宅で生活を続けたい

### －親子の望む生活－

社会福祉法人奉優会 代沢居宅介護支援事業所

豊田 由美子、寺尾 弘子、上新 美佳

(多職種連携 8050問題 地域包括ケアシステム)

### 1. 目的

90代認知症寝たきりの母（要介護5）と難病を抱えた70代長男の二人暮らし。我が家を死ぬまで離れたくないと強い思いの母と不慣れながらもなんとか介護をしてきた長男。物で溢れた生活環境。長男は実家暮らしで職についたことがなく、母の仕事の手伝いや身の回りの世話をしながら生活してきた、典型的な8050問題を抱えた背景がある。長男が難病指定の病気が発覚したことにより、事業所初の親子プランとなった。主介護者の病状の進行と親子を取り巻く数々の問題点が多発し、支援に困難を要した。ケアマネジャーとして親子を支えていくために何が必要で大事なことは何かを考え、多職種・地域との連携を図る事を目的とした。



### 2. 実践内容

親子の望む生活をするための取り組みについて次の通りにまとめた。

- (1) 母、長男の再アセスメントを実施（生活歴、家族、生活状況、金銭面、住宅環境など）
- (2) PDCAサイクルの活用（P：計画を立てる、D：実行、C：評価、A：改善）
- (3) 多職種連携とネットワークの構築
- (4) 8050問題と地域課題の発見
- (5) 地域包括ケアシステムの構築に向けたケアマネジャーができる事を考える

### 3. 結果

親子を支える支援者側は、在宅生活の限界を感じ長男の将来を見据え、母の施設入所を検討。一度は入所につなげたが、母の強い希望と他県に住む長女の金銭的問題も絡み話が流れた。金銭的問題が絡んだ事等経過を、地域包括支援センターに報告した。現在、長男は難病の進行により要介護5、病状進行は深刻な状態。共に車いす生活となり親子共々途切れのないサービスを受け、その都度、調整する事により在宅生活は可能となっている。母は長男をこの家で生活できるようにと働き支えてきた。認知症になっても、強く在宅を希望するのはそのような背景からだろう。長男は一生懸命働いてきた母を不器用ながらも自分なりに支えてきた。今まで自分が担ってきた事ができなくなった事もあり、在宅での生活に不安が強い。その様な二人の気持ちを踏まえ意見のすり合わせが今後も重要とされる。サービス介入においては、連絡ノートの活用や状態変化の際、担当者会議の開催により、すべての関係者が状態把握と情報共有をする事ができた。

#### 4. 考察と今後の課題

ケアマネジャーは担当者が一人で悩み、抱え込む必要はない。何か思い悩んだとき、誰かに相談、発信することが大事である。事業所の同僚の意見や多職種と連携し、担当者会議を開催する事で、それぞれの専門職から意見をきくことで、自分では気が付かなかった違った発想や違う視点からのアプローチ、相乗して情報を増やす事ができ、選択肢も増えていく。お互いを信頼し、意見を出し合えるチームケアの構築もケアマネジャーとして大事な役割である。

担当している地域は比較的裕福な家庭が多いこともあり、親の資産で生活している40代50代の子も多く存在するのではと思われる。一般的に8050問題は子供の引きこもり、精神疾患や障害が主な要因となっている事が多いといわれているが、このケースのように親の資産があることでも発生する事、親の資産があるために表に出にくくなっていることなどがわかった。親が元気だった頃は問題なかったが、親の介護等に費用を要する事になり子の生活費が不足した時、子はどうするのか。今後もこのようなケースが増えていくのではないだろうか。また、関係者だけでなく、地域にも発信することで地域としての課題に繋げる事ができると考えた。

住み慣れた地域で、誰もがいつまでも長く住み続けるために、ケアマネジャーとして、現場の声を地域に発信し続ける事が必要である。



#### <助言者コメント>

徳永 宣行 (世田谷区介護サービスネットワーク代表)

認知症、意思決定支援、8050問題、経済的問題など在宅介護で支援者が悩む様々な問題のすべてが重なっているようなケースであり、ご苦労なさったのではないかと推測します。

そのような状況でありながらも、積極的に多職種連携をして、チームケアを実現できたことは、同じようなケースで悩む、多くの支援者の参考になると思いました。

また、できるだけ早い段階から、将来的な課題について考える機会があれば、解決策も多く選択できるという事を発信することはとても重要です。ぜひ、今後も地域の皆さんと連携を深めていただきたいと思います。